

# PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER  
Volume  
149  
2022.4

公益財団法人PHD協会  
2021年度会報149号

## 2022年度38期研修生来日

3年ぶりの招聘再開。想いを背負って、コロナ禍での研修に挑戦を！





## PHD LETTER Volume.149

## Contents

- P.2 38期研修生の招聘報告
- P.3-4 国内研修生2.0 研修報告
- P.5-6 国内研修生1.0 一年を振り返って
- P.7-8 **PHD Movement** vol.32 -分かち合い実践録-  
居住支援の次のステップへ  
～人権重視の登録支援機関としての取り組み～
- P.9 特定技能受入れ企業紹介 株式会社 メロディ
- P.10 三田市 社会福祉 × 多文化共生セミナー 報告
- P.11-12 With MYANMAR ミャンマーからの便り
- P.13 REPORT 「みんなのいえ」
- P.14 退職の挨拶 研修担当 山本健太郎
- P.15 PHDNews

表紙写真/関西国際空港の到着ロビーにて(38期研修生のブディさん)

## PHD協会のPは平和

## 温故知新 岩村語録 その21

父の幸次郎さん(故人)は「さなぎこうば」と呼ばれた工場を経営していた。当時盛んだった絹の絹糸工場から廃物のさなぎをもらってきて、そのさなぎから油を絞るとともにしぼりかすで肥料を作っていた。岩村さんは父のあとを継ぐべく、広島市内にあった旧制広島高等工業専門学校へ進学した。

そしてあの日、被曝した。

引用：1998年1月6日 朝日新聞夕刊「こころ」アジアの医療に尽くした岩村昇さん

岩村先生は被爆者であられ、平和への想いがひと際強い方でした。そしてPHD協会のPeaceから始めてくれました。しかしながら、ミャンマー、アフガニスタン、そしてウクライナと平和が脅かされています。岩村先生がご存命なら嘆かれるでしょうか、それとも行動を起こされるでしょうか。今こそできることを、そして祈りを。(さ)



PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT  
公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめて、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 149号

発行：公益財団法人PHD協会  
住所：〒653-0836 神戸市長田区  
神楽町3-7-4  
電話：078-414-7750  
FAX：078-414-7611  
E-mail：info@phd-kobe.org  
URL：http://www.phd-kobe.org  
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会  
01110-6-29688

## PHD 38期研修生の招聘報告

事務局長 坂西 卓郎=文



セティア ブディマンさん(インドネシア、26歳)

アシカ・チャルマカールさん(ネパール、24歳)

## 3年ぶりの研修生招聘！

2019年の研修生招聘以来、3年ぶりとなる研修生が来日できそうです。執筆時点では4月2日にインドネシアからブディさんが来日することが決まっています。この会報が皆様のお手元に届く頃にはブディさんは日本に居るはず。残念ながらネパールのアシカさんは現地でVISA発給が難航しており、来日は未定です。ただVISA発給の手続きが進めば来日できる見込みで、4月中には来日してほしいと願っています。2人は丸2年、来日を待っていており、念願の研修開始となります。

## ミャンマーからの招聘は断念

しかしながら、ミャンマーからは招聘を断念することとなりました。ご存じの通り2021年2月1日の軍事クーデター以来、国内での移動にも危険が伴います。またPHD協会自体が民主化運動を支援していることもあり、研修終了後の帰国についてもリスクが拭えません。あらゆる危険性について、トゥートゥーウェイさん及び元研修生達と何度も協議を重ねた結果、今年度は「招聘断念」という苦渋の決断となりました。ただトゥートゥーウェイさんも完全な断念ではなく延期です。本人は「ミャン

マーが平和になったら日本に行きます。その日を楽しみにしています」と語っています。待機期間中に誰よりも日本語の勉強をして、私たちにも日本語の文章でその想いを何度も送ってくれました。意欲では一番強いものを持っていただけに、断腸の思いだったと思います。重ね重ね平和の尊さを痛感させられます。

## 想いを背負って、コロナ禍での研修に挑戦を！

来日できることになった2人はトゥートゥーウェイさんの想いも背負って、研修に励んでくれると思います。コロナ禍での初の研修実施となります。研修スタイルもこれまでとは大きく変わらざるを得ません。具体的にはホームステイという当会の研修の一番の特徴もその変更を余儀なくされています。連動して研修旅行の実施なども従来通りとはいえないと思われます。研修計画が未定の部分も多く、指導者、ホストファミリー、ボランティアの皆様にはご迷惑をおかけすることも多いと思いますが、38期生へのご支援のほどどうぞよろしくお願い致します。





PHD 2021年度 第1期 国内研修生2.0 研修報告

山本 健太郎 = 文

国内で活動する外国人を対象とした国内研修生2.0制度。初年度はミャンマー カレン民族の留学生ナンミミさんとロンさんが一年間の活動をともにしました。学業、アルバイト、シェアハウス居住、進路準備と忙しい毎日の中、その空き時間に組み入れた研修。コロナ禍や時間的制約もありましたが、民族への強い想いをもち、目の前の研修にひたむきに取り組む2人の姿が印象的でした。皆様へ感謝を込めて2人の一年間を振り返ります。

ロン

ミャンマー カレン民族 / 26 歳

「カレンの若者や子ども、難民の人たちのために頑張りたい」と、穏やかな心の中に熱い気持ちを秘めたロンさん。



カレン民族について熱弁をふるう

サッカー指導研修では、YMCAの皆さまのご指導の下、コーチング技術を磨くことができました。子どもたちに積極的に話しかけ、いつも「ロンリーダー」と慕われていました。秋のサッカー行事では、ミャンマー長田女子チームを指揮し、パス

やポジショニングの指示で鼓舞するなど、すっかり熱血サッカーコーチの顔をしていました。動画編集研修でも、電子機器や編集用ソフトの使い方について基礎から学びました。シェアハウスでの一年を通して、他国の居住者たちとも会話を重ね、日本語で自分の考えや思いを表現する力を地道に養いました。

ロンさんは4月から大阪のIT専門学校へと進みます。ITスキルの学びを深め、日本での就職、そして帰国後にカレン民族の若者たちへの指導に繋がっていきたくと意欲的です。彼の新たな挑戦を私たちも応援し続けたいと思います。



ミャンマーサッカー大会でコーチとして指示を出す

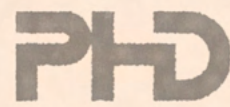


カレン新年のイベントで踊りを披露したロンさんとナンミミさん

私はリーアロンと申します。ミャンマーのカレン族です。留学生として日本に参りました。PHD協会で国内研修生としてサッカーCoachingと動画編集を勉強しました。サッカーCoachingをYMCA増田先生に学びました。サッカー練習とかTheoryとか勉強して、リーダーシップも勉強しました。サッカーのことでだけでなく、サッカークラスに参加している子どもたちと話す機会がたくさんありました。サッカーについて知識も増え、日本語も勉強できて思えば良かったです。動画編集を学ぶ時間は短かったですが、動画の

Tutorialを見て、あと自分でやってみてできました。シェアハウスのことも話したいです。シェアハウスで住みながら、いろんな国の人たち、PHDスタッフと話す時間はたくさんあって、私の日本語も上手になったと思います。スタッフたちは優しく、私はいろいろなことを勉強しました。私は勉強したことをカレン州にいる若者たちにシェアリングして、教えたいです。研修の先生方、PHDの皆さま、心より感謝申し上げます。

ロン

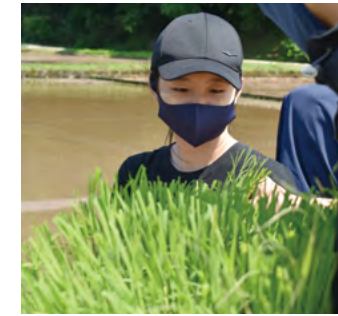


PHD 2021年度 第1期 国内研修生2.0 研修報告

ナンミミ

ミャンマー カレン民族 / 26 歳

ミャンマーでは、お菓子作りの経験がなかったナンミミさん。それを一から学ぶため、春先は地域のお店見学、夏以降は職員、国内研修生の指導の下、研修を実施。クレープやドーナツ、ブラウニーと、様々なお菓子づくりに挑戦し、味付けや段取りの工夫、日本語のレシピの読み込みにも励みました。また、ソーシャルワーク研修として困窮下にある外



豊岡総合高等学校インターアクトクラブの田植えに参加



国人へのヒアリングや食料配給に同行し、対人支援にも触れました。その他、スポーツ、チャリティバザー、カレン新年祭などの活動企画・参加と、常にリーダーとして周りを引っ張りながら取り組んでいました。

ナンミミさんは、この春から大阪にある専門学校へ進学し、建築について学びます。

「私はやりたいことはちゃんとやる。諦めないでトライする」、頑ななまでに揺るがない意志の強さ、そして、時折見せる屈託のない笑顔が頭から離れません。彼女のこれからの日本生活、そして帰国後の活躍に心からエールを送りたいと思います。

私はナンミミ ポーイゴンと申します。ミャンマーのカレン族です。2020年に留学生として日本に参りました。日本語学校で勉強しながらPHD協会で国内研修生としてお菓子作り、ソーシャルワークを勉強しています。日本に来たばかりにPHDと出会って良かったと思っております。シェアハウスで住みながら色々なことを勉強になって他の外国人と交流することもできました。他の人に食料支援に

行く時私一緒に行ってそれから私の民族のため頑張りたいのは強くなった。私の日本語も上手になると思っています。川西ロータリークラブがもお世話になっており私のために大経験でした。PHDのスタッフ皆様とロータリークラブのお父様にいつも感謝しております。これからもっと頑張っていくのよろしくお願ひ致します。

ナンミミ  
行. 8 8

ロータリー 米山記念奨学会

ナンミミさんは、年間を通じて、川西ロータリークラブ様のもとで、たくさんの学びをいただきました。皆様の多大なるご理解とご支援に心より感謝申し上げます。



3月の例会にて、ナンミミさんのカウンセラーの山岡さん（中央）と口腔衛生でお世話になった徳永さん（右）



## 松浦 あおい

私は国内研修生としての期間を通じて、本当に様々な経験をさせて頂きました。中でも、**私** 居住支援事業で得た学びは計り知れません。当事者に寄り添いながら、それぞれの自立へと結び付ける為にはどのようなアプローチが正しいのか、試行錯誤の連続でした。ですが、同じ目線に立ち、一人一人と真剣に向き合い行動することで、私自身も彼らからパワーを貰っている事に気がきました。時には躓くこともありましたが、「ありがとう」の言葉を受け取ったときは本当に嬉しかったです。PHD協会で得た学びを、しっかりと次のステップへと結びつけていきたいと思います。皆様、一年間本当にありがとうございました。

## 田村 華奈

PHDでの活動を通して、日本で不条理に直面する外国人と多く関わってきました。問題と向き合うことは、時に心が痛く苦しかったですが、目を逸らしてはいけない問題だとも感じました。この経験が、不合理を正したいと社会問題に取り組み続ける大きな原動力になりました。そして、自身の留学を決めるターニングポイントとなりました。私は今年の3月から文部科学省の「トビタテ留学ジャパン」で一年間海外へ行きます。PHD協会で得た経験を糧に、常に視座を高く持ち、挑戦し続けたいと思います。一年間関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。

シェアハウスで交流する国内研修生たち。左から田村さん、佐藤さん、ナンミミさん、合田さん、松浦さん



食料支援を通じて知り合ったオカピョーさん（ミャンマー・左）、張さん（中国・中央）と卓球大会へ出場する成田さん（右）

## 成田 航輝

2021年4月からインターンを開始しました。外国人との関わりや、食料支援に直接的に関われたことは良い経験だったと思います。特に印象的なのは、食料支援やアウトリーチを通じて色々な外国人の方と出会い、スポーツのイベントなどにも一緒に参加できたことです。またそれと同時に、外国人の方が抱える生活課題が沢山あると感じました。この4月から、食料支援で得た知見を直接活かすことのできる仕事をするかどうかは未定です。しかし、この一年での学びは人生にとって非常に大きいものとなりました。一年間大変お世話になりました。

## 佐藤 里紗

**国**内研修生として活動させて頂き、日々学びの連続で実りある一年となりました。この一年間を通して、たくさんの方々と出会い、「人と人との繋がり」の大切さを実感しました。次年度からは、タイのチェンマイにある現地校で日本語教員として、高校生に日本語指導を行う予定です。これからも「ともに生きる社会」の実現に向け、自分自身にできることから取り組んでいきたいと思えます。PHD協会職員の方々をはじめ、ご指導いただきました全ての皆さまに感謝申し上げます。

## 合田 ひな

**私** は2021年からの一年間、自分のやりたい事や環境が大きく変化し、思うように国内研修生として、活動が出来ませんでした。それでも、参加したひとつひとつの活動は自分と同年代の人たちの思いと向き合うことができたり、留学生たちの思いを聞かせて貰ったり、他では得ることができないようなとても大事で貴重な経験でした。環境が変わり、この3月から地元香川で実家の家業を手伝うために、医療事務の職に就くことになりました。今はやるべきことが山積みで、先は長いですが、学べること、できることに感謝をして努力してみようと思っています！



# PHD Movement vol.32

居住支援の次のステップへ  
～人権重視の登録支援機関としての取り組み～



## みんなのいえ、ロゴマークに込めた「自立」への想い

みんなのいえのロゴマークにはいくつもの〇がある。困窮者が態勢を立て直し、自立して次のステップへ進んでいくイメージだ。外国人の自立において、とりわけ重要なのは就労になる。しかしながら日本語ネイティブでないというハードルに加え、在留資格の壁があり、そう簡単ではない。

そこでPHD協会は2021年6月10日付けで登録支援機関としての活動を開始した(21登-006125)。その目的は2つ。

1. 居住支援の次、自立のための就労を応援したい
2. 多文化共生社会の実現。就労を通じて、相互理解の輪を広げる

## 登録支援機関の役割

まず登録支援機関について説明したい。登録支援機関は在留資格「特定技能」の人の就労や在留資格取得のサポートができる。

在留資格「特定技能」は比較的新しく2019年4月に深刻な人手不足に対応するために生まれた。技能実習生制度の建前が「国際貢献」であることと比較すると、特定技能は「労働者としての受け入れ」に門戸を大きく開いたと言える。執筆時点では「特定技能」は介護、農業、建設、宿泊などの人手不足が深刻化する14業種が対象となっている。

登録支援機関とは「受け入れ企業に代わって支援計画の作成・実施を行う機関」である。その目的は「雇用する受け入れ企業に伴走し、外国人労働者の人権の保障及び生活の質を向上すること」となっている。これは外国人労働者が歴史的に人権を蔑

事務局長 坂西卓郎 = 文  
- 分かち合い実践録 -

ろにされてきた傾向を踏まえて、雇用者だけが人権の保障や生活の質向上に責任を持つのではなく、第三者である登録支援機関がカバーする積極的な補完の試みと言える。

その役割には「相談対応業務」を軸として、「転職支援」も含まれるなど、外国人労働者の人権を守る最後の砦とも言える。

## 高い手数料？

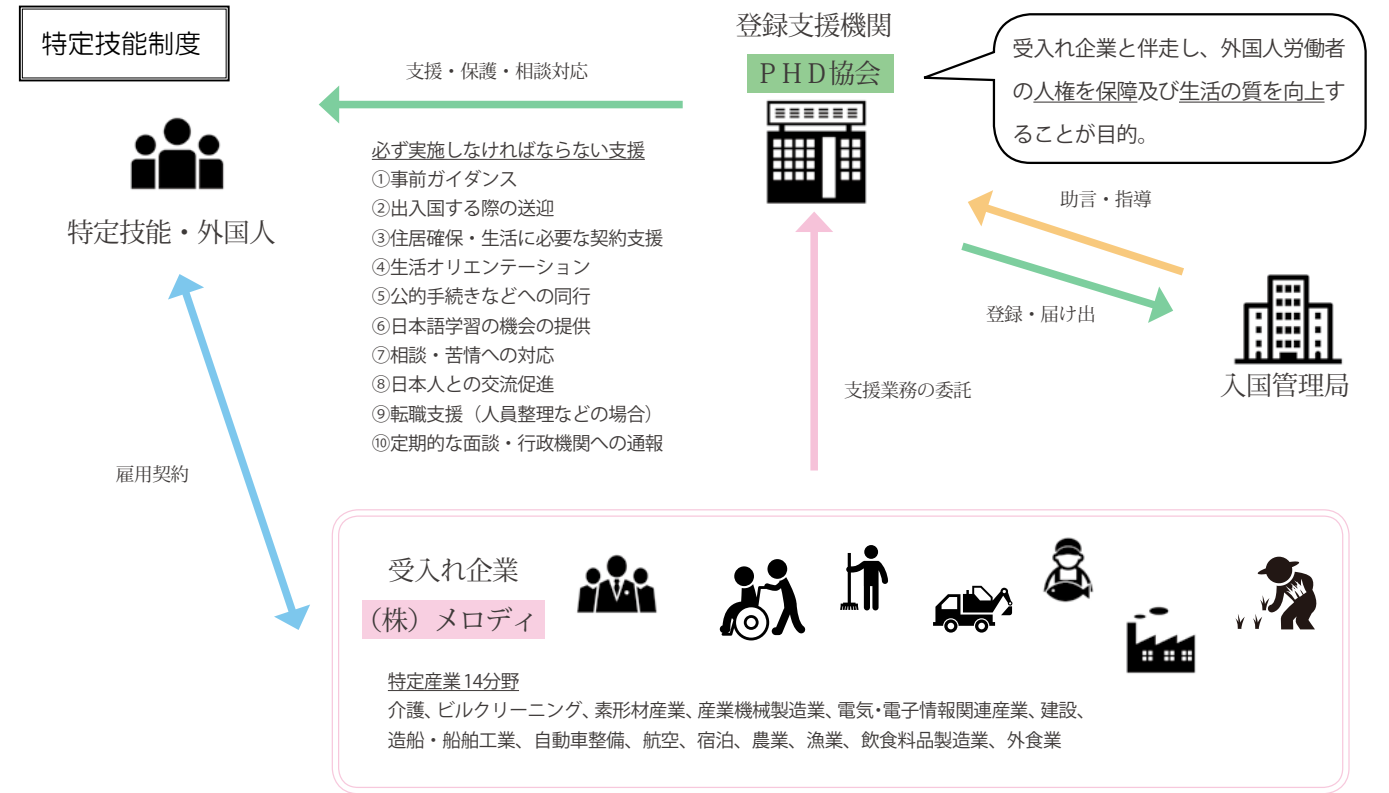
ただ登録支援機関にも課題はある。その一つが手数料だ。登録支援機関が受け入れ機関である企業に外国人労働者を紹介する時の手数料の相場は年収の約3割。つまり年収300万円であれば、90万円となる。この手数料の存在が外国人労働者の待遇に悪影響を与えかねない。例えば技能実習生の場合は出国前に多額の借金を作って来日してくる人が多く、来日後の生活に重くのしかかることがある。法的には本人が手数料を負担することは禁止されているが、色々な名目で搾取されている場合もある。そもそも紹介料というのは法的に認められているとは言え、違和感がある。



介護の日本語テキスト、右はミャンマー語版

## NGOが人権重視でやったらどうなる？

そこで「NGOが人権重視で登録支援機関をやったら三方よしになるのでは」という発想が生まれた。三方とは外国人労働者、受け入れ企業、市民及びNGOである。外国人労働者が愛と熱意を持って受け入れてくれる企業で就労することで、待遇面だけではなく、働き甲斐のある環境を手に入れる。受け入れ企



業は外国人労働者を受け入れることで、触発され、自社の事業の見直しにつながる、なにより雇用確保にもつながる。そして、PHD協会は外国人労働者の人権の保障や生活の質の向上という報酬を得る。もちろん、紹介手数料はいただかない。その分、外国人労働者の待遇改善や教育実施を企業に約束してもらう。

## NGOへの報酬は？

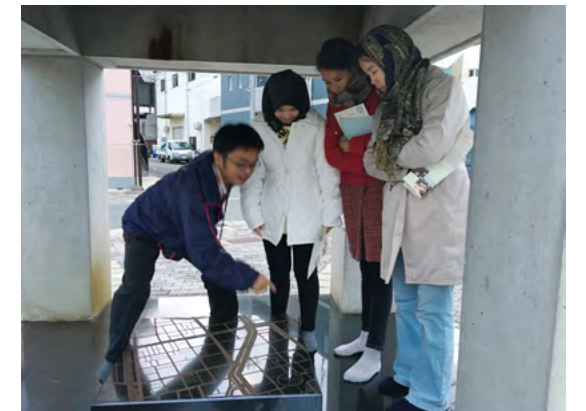
加えて当会の居住支援活動における最終的な目標は「多文化共生社会の実現」、「外国人への偏見、差別を無くす」ことであるが、そのアプローチとして「外国人労働者の定着」を意図している。

具体的には、外国人労働者の方達が安価な労働力としてではなく、一人の人間として愛と熱意を持って受け入れられ、成長していく。そうすれば、その人が仕事や生活を通じて出会う人たちの外国人への意識が変わる、ないしはポジティブなものになっていくというイメージだ。就労後の研修については今まで国際協力人材の育成を40年間行ってきた経験を活かしたい。

登録支援機関として、そういった成功例を一つでも多く作ることが、当会の最終目的の達成につながると信じている。

## 特定技能「介護」一人目・モジンさん、ミャンマー支援の一環として

上記の想いを持って、現在進めているのが、ミャンマーから



大震災を経験した神戸、防災研修はかせない(2018年度)

の留学生、モジン・タウさんの株式会社メロディさんでの就労である。モジンさんとは食料支援活動の中で、メロディさんとはミャンマーの民主化支援運動の中で出会った。「ミャンマーのために何かしたい」というメロディさんの神田代表の想いが、今回の就労に繋がった。その経緯は神戸新聞さんでも取材いただいた。在留資格等の準備は順調に進んでおり、この4月1日から就労が開始する。

今回の就労は多文化共生の実現に加えて、ミャンマーを支援したいという想いがある。残念ながら軍事政権は長期化する可能性もある、できることを少しずつ続けていきたい。



特定技能受入れ企業紹介



株式会社 メロディ  
兵庫県尼崎市大庄中通1丁目21  
https://melody-house.jp/



Myanmar  
ミャンマー



PHD MOVEMENT (P7-8)にて紹介した、兵庫県尼崎市にある株式会社メロディさん。通所介護、訪問介護、訪問看護、居宅介護支援、サービス付き高齢者住宅、住宅型有料老人ホームを運営しています。2021年2月のミャンマークーデターを受け、ミャンマー民主化への一助となればと、ミャンマー留学生の雇用を始めました。メロディさんは地域との繋がりも濃く、近くの学校での講演や地域コミュニティとの連携など幅広く活動、顔の見える関係を大切にされています。ミャンマー民主化への支援として始まった雇用ですが、文化や言葉の違う国の人たちが職場にいる・地域での交流があるということが、多文化共生社会への大きな一歩にもなっているのだと思います。

現在、メロディさんで働いているミャンマー出身のお二人は、介護福祉士の国家資格取得を目指しています。この4月から、モジンさんは特定技能「介護」でメロディさんに就職、マイさんは引き続きアルバイトをしながら、介護の専門学校に通います。



仕事終わりの日誌に取り組む



利用者の方とクリスマスの飾りつけをするマイさん



レクリエーションの時間に、尼崎西高校のボランティアの生徒さんと共に利用者の方へ寄り添うモジンさん



介護で使う専門用語の授業



夏祭りのイベントで浴衣姿の2人・たこ焼きにも挑戦



神田代表より、  
「介護で働きたい」という一生懸命なまなざしの若者に会い「この子たちを守り育てよう、スタッフみんなでお母さんになろう」と心に決めて一年が経とうとしています。  
未だ厳しい母国、大切な家族の安否を気にしながらも、毎日けなげに一生懸命学び、仕事をしています。清々しい二人は利用者様の人気者、介護スタッフとしても着実に力を付け、今では、デイサービスでなくてはならない存在になってきています。メロディに新しい風を吹かせてくれた二人。気が付いたら私たちがの方が元気もらっています。これからも大切に育ててあげたいです。

2022年、尼崎で開催された「21ミャンマー緊急集会」にて、フルートで追悼演奏をするメロディの神田代表(右)



JICA-NGO等提案型プログラム「兵庫発！多文化共生のための市民社会とビジネスセクター連携構築プログラム」～外国人労働者とのより良い共生に向けて～  
三田市 社会福祉×多文化共生セミナー 報告

中村 朱里 = 文

社会福祉における外国人支援  
～分野を横断した支援体制づくりのために～



3月1日、三田市で「社会福祉における外国人支援～分野を横断した支援体制づくりのために～」を開催しました。

外国ルーツの住民が抱える課題には、言語や文化の違いなど外国ルーツ特有の課題もあれば、就労、保健医療、教育、福祉など生活者の誰もが直面する課題もあります。異文化理解や外国語対応を得意とする国際交流協会と社会福祉のプロである社会福祉協議会が連携することで、外国ルーツの住民を取り巻く生活環境の改善がより総合的に進むのではないかと。このような課題意識を起点に、この企画は始まりました。

主催団体である三田市国際交流協会様とPHD協会に加え、エフエムわいわい様と三田市社会福祉協議会様にも企画段階から深く関わっていただき、多団体の経験とノウハウを持ち寄ったセミナーとなりました。当日は会場に39人、オンラインで39人の参加がありました。

第一部は、吉富志津代氏（名古屋外国語大学教授/FACIL理事長）の基調講演「社会福祉協議会と国際交流協会の連携の

必要性-多文化ソーシャルワークの発展のために-」から始まりました。続いて、長谷部治氏（兵庫区社会福祉協議会 地域支援課長/エフエムわいわい理事）、稲葉康介氏（豊岡市国際交流協会 事務局長）、寿賀素子氏（三田市国際交流協会 副会長）、大村和也氏（三田市社会福祉協議会 総務課長）から各地域の課題や取り組みについてお話いただきました。

第二部ではグループに分かれ、「社会福祉と多文化共生の連携」について活発な意見交換が行われました。国際交流協会の参加者の感想をご紹介します。「自分たちは孤独だと思っていた。自分たちだけで支援して、誰も助けてくれないと思っていたが、今日、社協の方たちも色々と考えてくれていることを知れて一人ではないんだと感じた。」

このセミナーをきっかけに、多文化共生と社会福祉の関係者の方たちの距離がぐっと縮まり、三田市では連携の具体的なアイデアも生まれつつあるようです。今後の展開が楽しみです。



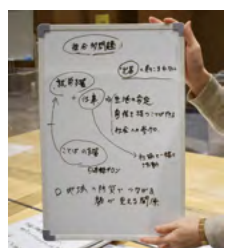
講演者のキーワードを書き出す



第一部の最後に参加者からの質問に答える登壇者のみなさん



ホワイトボードに書き出し、意見交換する参加者

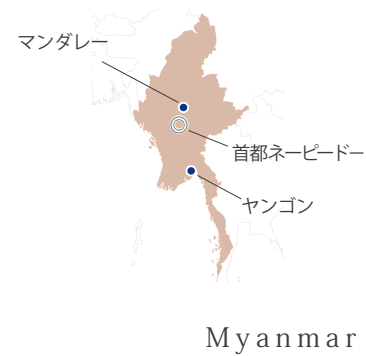




## PHD With MYANMAR

### ミャンマーからの便り～草の根の人たちの想い～

山本 健太郎 = 文



昨年2月1日、まさに晴天の霹靂だった軍事クーデター。あれから一年以上が経ちますが、軍の支配は今なお続き、市民生活はさらに困窮を極めていきます。それは単なる仕事やお金の不足だけでなく、心の苦しさも意味します。

元研修生のモーママさん（2013年度）曰く、村で田畑のない世帯やCDM（不服従運動）の実施世帯は、年始の農作業がない数カ月、菊栽培への出稼ぎや店での小売り、子ども向けの家庭塾などをして、生活を維持する他ありませんでした。さらに、食べ物や油、生活用品の価格高騰が顕著で、日々の生活も逼迫しました。ここ最近では、村のあちこちで軍の見回りが増え、身辺・持ち物調査を頻繁に実施。不審な点があれば、すぐさま罰金や連行は日常茶飯事、とのこと。今までのありきたりな日常、家族や友人たちとの他愛ない時間が脅かされ続け、人々の心も疲弊してしまったのです。

軍によるネット規制は今も続いています。私たちは元研修生らの安全性に配慮しつつ、彼らとの定期的なオンライン会議を通じて、現地ミャンマーの“今”を知ろうとしています。今号では、現地の草の根の人々（村の困窮世帯の方々）からのメッセージをお届けします。

（※モーママさんには、当事者たちへのヒアリングでご協力いただきました。）



### 【元保育所の先生】

2年前からコロナのために保育所が閉鎖。再開する準備は進めていたけど、昨年クーデターが発生して、それどころじゃなくなった。突然仕事ができなくなり、家族、生活、健康、村、保育園、自分ではどうしようもできないことばかり、いつ死ぬかを考えると何もできない。2年間ずっと苦しみの中にいる。大工だった夫も仕事ができなくなり、家族を支えること自体難しくなった。今は私がかつての村の子どもたちに勉強を教えている。

家族6人の生活を支えるのは大変。病人がいても病院にさえ連れていくお金がない。できるだけ自分で頑張りたいが、どうしようもない時は他の村人からお金を借りたり、食べ物のサポートをもらって繋いでいる。今、ミャンマーの教育は何もない。

学校はずっと閉まったまま。特に、自分の子ども、村の子どもたちを見てるととても悲しい。軍人たちは、ミャンマーの経済や教育状況が悪くなっているのを知っているのに、市民を苦しめ続けている。そのことに心が痛む。

この国はどこへ行くのだろう。未来の夢も目的も、今は見えない。



ミャンマー・僧院学校の教材

### 【戦地へ発った娘の帰りを待つお母さん】

次女がPDF（国民防衛軍）に参加してから、数カ月が経つ。

「今、大丈夫？ちゃんとご飯を食べた？」と娘に連絡するもなかなか返事が来ず、無事かどうかいつも気が気でない。心配しすぎて、心も壊れそう。

夫は大工、長女は僧院学校の先生をしているので、生活はなんとか維持できる。「私たちには毎日食べるもの、寝る場所がある、でも娘にはそれがない」とお母さん。

戻らない娘のことを想うと悲しいし、夜が来るのが怖い。ただ、このクーデターは私だけじゃなくて、国民みんなが大変。デモクラシーをもらえないと、平和な日々は戻ってこない。娘も帰ってはこない。

毎日止まらない涙。いつか戻る普通の日を信じている。



軍に見つからないように気をつけながら、ヒアリングをおこなうモーママさん



日本語を学ぶ村の人

2021年3月に設立したWith Myanmar基金。これまでに皆様から頂いたご寄付は、元研修生たちをはじめ、彼らの村やスラムに住む上記のような困窮世帯、戦災孤児が集う孤児院への食費支援、衛生用品の購入費用として活用させていただいています。

残念ながら、混迷するミャンマーにおける今後の展望は見いだせていません。軍と市民の溝は深く、内戦状態が続いています。しかしながら、私たちは今も現地で民主化を目指す元研修生、そして彼らの周りで生活に苦しむ草の根の人々のサポートのために、この基金を通じて、今後も支援を続けていきます。

モーママさんが頻りに語る言葉「どうかミャンマーのことを諦めないでください」というメッセージをずっと思い浮かべながら。どうか皆さまの変わらぬご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。



## REPORT

国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」  
1年半を迎えて

施設長 濱 宏子 = 文

## 開設から一年半

2020年10月に開設した国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」はたくさんの方々に支えられ、お陰様で開設から一年半を迎える事が出来ました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と感謝しております。

執筆時点での入居者はミャンマー人4名、ベトナム人1名、国内研修生1名の計6名ですが、この春、それぞれの旅立ちを控え、慌ただしい日を過ごしています。冷蔵庫の中のそれぞれのお国の調味料や、ごみ当番やお風呂使用中のボードに刻まれた名前を見る度、彼らが初めて来た日の事や、ここで共に過ごした日々の事が鮮やかに思い出されます。



入居の説明を受けるミャンマー人留学生のウィンさん(左)

## ベトナム人Tさんの事情

ベトナム人のTさんが「RINK-すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク」の早崎さんに伴われ、「みんなのいえ」にやって来た昨年末の事。日本語もたどどしく、帽子を目深に被ったTさんが抱えていた問題は書類に記入できる住所がないという問題でした。

Tさんは悪質なブローカーに騙され、不当に500万円の借金を背負わされていまして。ある訴えを起こすためにどうしても住所が必要だったのですが、当時の住まいでは住民票を取得できない状況でした。外国人達が抱える問題はひとつとして同じものはありません。在留資格、食料、住居、就職、転職、アルバイト、進学、医療に至るまで多種多様です。みんなのいえに入居し住所を得て、問題解決したTさんの顔には日ごとに笑顔が増えていきました。真面目な人柄のTさんは次第に皆に打ち解け、仕事場でもらってきた食料を職員に分けてくれるまでになりました。

例え一時的な身の置き所ではあっても寄り添いを大切にし彼の未来を共に考えた成果は、無口な彼の笑顔が雄弁に物語ってくれていました。

「私は寂しいです。このシェアハウスの生活に慣れたのに転居しなければならないので、寂しいです。ここでいつも助けていただき本当にありがとうございます。」この「みんなのいえ」を離れる寂しさが綴られたTさんの短いメッセージ。たとえ小さいコミュニティで国籍が違って、皆が支えあい尊重しあい暮らした気持ちが伝わります。

## 再び巡る春に

日本に暮らす外国人は現在280万人にものぼり、その多くが日本の経済を根底から支えてくれています。彼らは私たちの隣人であり頼もしいパートナーでもあるのです。そんな彼らが少しでも日本を好きになって、母国に帰った時に懐かしく日本を語ってくれるのが昔も今も変わらぬ私達の願いです。春が巡り「みんなのいえ」にどんな新しい出逢いが待っているのか、少しの不安と新たな出逢いへの喜びが胸に去来します。困窮に負けず元気な挨拶が飛び交うシェアハウスでありますようにと心から願います。

## 退職の挨拶

研修担当 山本 健太郎

思い返せば、2019年春。草の根の人たちと学び、支え合い、ともに生きていくというPHD協会の理念に共感し、その門を叩かせてもらってから、はや3年の月日が流れました。

これまでの活動を通じて、研修生、留学生、実習生をはじめ、150を超える多くの当事者たちとの素敵な出会いがありました。現場を担う者として、当事者を国籍や宗教、在留資格といった枠で判断するのではなく、一人の人間として向きあう。その人の想いや状況を聞き、その人自身を知り、関係性を築く事を大切に、ひとりひとりが自分の可能性に自ら挑戦していけるような「寄り添い」を心掛けてきたつもりです。

ただ、「寄り添い」とは、口で言うほど簡単でも甘くもなく、当事者へのアプローチ、伝え方、自立への導きなど、常に実践での試行錯誤から、学びや気づきがありました。自分の殻を破る研修生、夢へ挑む留学生、制度の壁に阻まれた難民申請中の方など、一つとして同じケースはなく、彼らとの出会いを通じて日本社会の課題、回り回って自分自身の課題とも向き合う日々



2019年度研修生(左からゼンゼンさん、スシラさん、プツリさん)と山本

でした。

その中でも、研修担当としての覚悟、愛、情熱だけは、入職したあの日から変わらず、自分自身が唯一貫けたものかもしれません。それは、先の見えないコロナ禍であっても、支援者、指導者の皆さま、そして同僚、研修生、国内研修生、関わった全ての外国人の方々の存在が、いつも自分の心を照らし、燃やし続けてくれたからです。

私は4月から学生時代を過ごした北陸地方、富山で再スタートを切ります。PHD協会ですべての経験を糧に、対人支援につい

て学校で学び直し、その後は地域で活動していく予定です。人として、ソーシャルワーカーとして成長し、いつかきっと国際協力や多文化共生の舞台に戻ってきます。

皆さまに会い、こんなにも誇りとやりがいを感じる仕事に巡りあえて幸せでした。

3年間本当にお世話になりました。心からありがとうございました。今後ともPHD協会と研修生、居住支援活動へのご支援とご協力をどうぞ宜しくお願い致します。

## 集めています！ PHD 物品収集部

使用済み切手、書き損じハガキ、未使用切手、未使用ハガキはPHD協会の活動を支える大きな活動資金となります。ご自宅、職場、学校などで集めて当会へお送りください。換金し、日々の郵送料として大切に活用いたします。



物品の受領書については、希望者の方にのみ発行しております。

## ◆ 未使用切手・ハガキ

当会の会報、ご案内などの各種発送物の郵送料となります。

## ◆ 書き損じハガキ

新しい切手・ハガキに交換後、当会からの案内など各種発送物の郵送料となります。

## ◆ 使用済み切手・外国貨幣

1000円/kgで買い取っていただき、研修生の招聘・研修などの活動費となります。

## ◆ 未使用テレホンカード

当会の電話代にあてさせていただきます。



# PHD News

## ◆ 40周年記念式典アーカイブ動画のご案内



PHD協会 Youtube  
チャンネル「草の根」



上記のQRコード又は当会HPまで  
アクセスください。

PHD協会 [www.phd-kobe.org](http://www.phd-kobe.org)



2021年11月27日にオンラインにて開催した40周年記念式典が、Youtubeチャンネル「草の根」にていつでもご覧いただけるようになりました。その他にも各国の元研修生や支援者の皆様からのメッセージ動画(45本/3月末時点)をアップロードしております。

## ◆ 第5回はなやか KANSAI 魅力アップアワード 社会的効果部門特別賞を受賞!



近畿経済産業局 提供

国内における優れた外国人受入環境整備への取組を発掘・表彰する「はなやか KANSAI 魅力アップアワード」(事務局:経済産業省近畿経済産業局)にて「みんなのいえ」の活動が社会的効果部門で突出して優れた取り組みとして特別賞を受賞しました。審査委員のコメントを紹介します。「日本で暮らす多くの外国人材が幸せになり、日本が好きになる神戸発のプログラムとしてさらなるご発展をお祈りいたします。」

→詳細はこちら

第5回はなやかKANSAI魅力アップアワード

[https://www.kansai.meti.go.jp/3-1toukou/2021koubo/5th\\_award\\_leaflet.pdf](https://www.kansai.meti.go.jp/3-1toukou/2021koubo/5th_award_leaflet.pdf)

## ◆ ゆうちょ銀行の手数料が変更されています。

2022年1月17日から、ゆうちょ銀行にて、払込料金の徴収される項目が増えました。これまで、赤色の払込取扱票(料金受取人負担)をご利用時、払込する方には手数料はかかりませんでした。今回の変更では、赤色の払込取扱票(料金受取人負担)を利用時でも、**現金**で払い込む際、払込する方に、**110円の払込料金**がかかります。ゆうちょ銀行口座からお振込みいただく場合は必要ありません。ご負担をおかけしますが、何卒よろしくお祈りいたします。詳細は、ゆうちょ銀行のHPをご参照ください。

赤色の払込取扱票(料金受取人負担)  
をご利用の場合



払込み料金はPHD協会負担

ゆうちょ銀行口座からの支払い

0円

現金で支払い

110円(払込人負担)

## 山本との思い出

### ○月×日のPHD協会

**芳田** 研修担当補佐として2019年に山本とタッグを組む。食の細い研修生たちが食べきれなかった昼食を2人で完食し、お腹が苦しかったのも良い思い出。

**中村** 印象に残っているのは伝説の値切り交渉。噂には聞いていたが、生で見た時はびっくり。普段優しい山本の豹変ぶり。こんな押すんだ&私にはできない。

**坂西** 入職後すぐ、残業中に牛丼を買って来てくれたナイスガイ、山本。でも、その時は妻の手料理が待っており断る坂西、そして帰宅後、妻に怒られる坂西。

**中島** 入職すぐ、一人気まま暮らし山本に目をつけ、食事にアウトドアに誘いまくり。でも、気づけば誘ってもらったことはなし。片思いだったようで寂しいぞ。

**濱** 2020年夏のアウトリーチ(飲食店巡り)。大量の汗をかく濱に心配する山本。二人の汗の量が、居住支援の土台を築いた。山本の重要な貢献の一つ。

**山本** 人との出会いに恵まれた3年間。目に見えない大切なものに触られた。振り返るといつも支えられてたのは自分だった。これからの人生で返していきたい。

以上、誰かのゴマすり順